

## ラーメンさまざま

24期 徳田完二

日本人にはラーメン好きが多いに違いない。それが証拠に、おおかたの街ではうどん屋や蕎麦屋よりラーメン屋の方がずっと目につく。私自身のことを言えば、ラーメンは大好きである。とは言え、健康維持のため、このごろはむやみに食べないようにしているのだが。

高校時代はラーメンと言えどもっぱらインスタントラーメンで、下宿で夜食によく食べたものだった。それは電熱器で作った。どんぶりは持っておらず、小さな鍋から直接食べていたような気がする。しかし、どういうものか、食べ終わったあとの鍋をどこでどう洗っていたのか、とんと思い出せない。

高校時代にラーメン屋に行ったのは、せいぜい一、二回だったと思う。下宿は三食付きだったので、そもそも外食自体をほとんどしなかった。

大学の時もインスタントラーメンをよく食べた。当時は、鍋のいない「カップ麺」なるものが出始めたころだった。たまにはラーメン屋にも行ったが、そんなに頻繁にはなかったもので、あの時代のラーメン屋の思い出はあまりない。

就職して初めて住んだのは広島だった。そこでラーメン屋に行った記憶はない。広島と言え、お好み焼きの中にうどんか焼きそばを入れ、目玉焼きをあしらった「広島風お好み焼き」の本場だから、ラーメン屋の出番はなかったのだろう。

広島の次に住んだのはラーメンの本場たる札幌で、ラーメン屋にはよく行った。子ども連れでの外食はラーメンが定番だった。札幌のラーメン屋では、塩、醤油、味噌のどれかを選び、さらに「ラーメン（普通のラーメン）」「チャーシューメン」「××ラーメン」などのメニューを選ぶ。「ラーメン、味噌」「チャーシュー、醤油」などと注文した。札幌が味噌ラーメン発祥の地だからというわけではないが、私は断然、味噌ラーメン派で、太い縮れ麺にからんだスープが好きだった。

ラーメンの特徴の一つはその多様性にあるのではないかと思う。ダシは豚骨か鶏ガラか魚。調味料は塩か醤油か味噌。麺は太麺か細麺。これらの組み合わせだけでも3×3×2通りある。これにトッピングをどうするかを加味すれば、ラーメンの種類は山ほどになる。札幌で行きつけだった店では、「牛乳ラーメン」「バターコーン・ラーメン」「ホタテ・ラーメン」「カニ・ラーメン」など、北海道ならではのラインナップを誇っていた。

ひとくちにラーメンと言っても、その種類は上で述べたように多様である。そのことが「ラーメン屋街」の成立を可能にしていると思う（「うどん屋街」「蕎麦屋街」というのはお目にかかったことがない）。札幌には何軒ものラーメン屋が集まった「ラーメン横町」「新ラーメ

ン横丁」と呼ばれるエリアがあるし、札幌近郊の新千歳空港には北海道各地のラーメン屋が出店している「北海道ラーメン道場」なる一角がある。商売仇であるはずのラーメン屋同士がたやすく共存できるのは、店ごとに異なった「売り」を打ち出せる多様性のためではなかろうか。これは、飲み屋街が形成されることに通じるのかもしれない。

ラーメンはまた、地方によって大きく違う。札幌ラーメンは鶏ガラスープをベースにした太めの縮れ麺である。これに対し、博多ラーメンは豚骨スープに縮れのない細麺だが、同じ九州でも熊本に行くと、またちょっと違ったラーメンが出てくる。北海道では、旭川に魚ダシ（たしかカツオだった）を売り物にしたラーメン屋があった。少し癖があるものの独特の風味に人気があり、私は一度食べて病みつきになった。今住んでいる京都では、「京風ラーメン」と言えば鶏ガラスープのさっぱり系を指すようだ。

「思い出深いラーメンは？」と聞かれたら、福島の喜多方ラーメンを挙げたい（喜多方は、福島県西部の、新潟県と接する街である）。私は臨床心理士として東日本大震災の少しあと被災者支援活動のため福島へ行ったのだが、その時、ある日の昼食に何の変哲もない食堂で食べたのが喜多方ラーメンで、煮干しをダシにしたやさしい味は絶品だった。心身の疲れが癒される感じがした。いつかもう一度食べてみたいものである。

## 連載ミニエッセイ 18

### 雪とお金

札幌に十六年ほど住んだ。私には住み心地のいい街だったが、困ったこともあった。一つは、東京などと違って、広さに見合った鉄道網が発達していないため、車なしには暮らせないこと。もう一つは、長い冬の間、雪とつきあわなければならないことだった。

雪について言うと、年によって多少違うが、おおむね十二月になる前に根雪になり、三月末ごろまで降雪があった。雪は放っておけばいつか必ず融けるものである。しかし、雪の季節が四ヶ月も続く北海道ではそうするわけにいかない。雪の処理を怠ればたちまち社会活動が麻痺してしまうからである。

札幌市が管理している道を隈なく除雪すると、一度に一億円（！）程かかるらしい。除雪とは、ホイールローダーやモーターグレーダーで路上の雪を道路脇に押しつけることを言う。私が住んでいた当時、札幌市の雪対策予算はたしか年間九十億円程だった。これは、仮に除雪のみに予算を使うとすれば、ひと冬に延べ九十回、市道をすっかり除雪できる額である。ただし、雪の処理は除雪だけではなく排雪もあるから、話はそんなに単純ではないけれど。なお排雪とは、道路脇に寄せられた大量の雪を除雪車でダンプに積み込み、河川敷などに捨てることを言う。道路脇の雪の量が一定限度になると、ひと冬に何度かこの作業が行われる。

このように、北国の雪というのはお金がかかる代物なのである。だから札幌市の住民税は高めだったと思う。しかしそのおかげで、よほどの豪雪でなければ主要道路は朝の通勤通学時間帯までに車が通れる状態にしてもらえた。除雪作業に当たるのは市が委託した土建会社の作業員である。彼らは、雪に埋もれる冬の間、土木工事ができない代わりに、除雪作業に励むのである。明け方近くに、除雪車両が働く音を、ある時は遠くに、ある時は近くに、寝床の中でよく聞いたものだった。

ところで、各家庭においても雪対策費用はバカにならなかった。スコップなどの雪かき道具への出費はたかが知れているが、融雪（雪を融かすこと）のための設備投資とランニングコストにお金がかかるのである。家のそばに広い空き地があれば、そこに雪を捨てることができる。しかし、そんな都合のいいものがない場合、自宅の敷地内で雪を融かさなければ、そのうち家は雪に埋もれてしまう。

融雪設備には三種類あった。地面に掘った穴に雪を放り込み、太いホースで湯をかけるもの。巨大な鉄板の上に雪を乗せ、下からガスバーナーで熱するもの。地面の下に温水が流れるパイプをめぐらせるもの。これら三つである。わが家では三番目の方式を採用した。

札幌に家を買ったあとしばらくは、さいわい隣りに広い空き地があったのでそこに雪を捨てることができた。しかし、年齢とともにそういう作業がつらくなり、融雪設備に出費することにした。いくらかかったか具体的な金額は忘れたが、けっこうな値段だったのは間違いない。その設備には、気温と降雪をそれぞれ感知する二種類のセンサーがついていた。そして、気温が設定温度を下回り、かつ雪が降ると、自動的にスイッチが入り、降った先から雪を解かしてくれるとともに、気温が設定温度を上回り雪が止むと停止する、という優れものだった。それが初めて作動した時、朝起きて家の前を見ると、玄関から道路までのアプローチはきれいに地面が露出していて、ちょっと感動した。

蛇足めくが、札幌では、次々と雪の降る真冬の間、道路脇に積み上げられた雪は白い。しかし、春が近づき降雪日が減ってくると、車のはねる泥水などで雪は黒く汚れて見苦しくなる。おおむね三月はそういう季節である。そして、四月になると、そこかしこに残雪はたくさんありながら、春の到来を告げるものが顔を現す。それはレンギョウの花である。札幌には庭先にレンギョウを植えた家が多かった。季節の色に乏しい時期、まだまだ冷たい空気の中に開く鮮やかな黄色は、長い冬がようやく終わり、季節が変りつつあることを示す証のようだった。レンギョウは北の国に咲くのが美しい。